TEI鼎談DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本
あなたは、まだ何にだってなれる。

成城大学 文芸学部 芸術学科

モネ、ルノワール、ゴッホをはじめとした美の巨人達。彼らが描いた絵画には、激動の歴史や政治的背景、移りゆく文化の息吹すらも描かれていたことをご存じでしょうか？芸術学科では、多様な知識と論理的な視点から芸術作品と向き合い、その作品の本当の意味を解き明かしながら、知の探究を続けていきます。





■大学生
大槻玲奈 さん



■先生
喜多崎親 先生



■卒業生
塚田萌菜美 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

成城大学文芸学部　芸術学科の特徴を教えていただけますか。



■先生
美学、東西の美術史、映画学、音楽学、演劇学など、様々な芸術ジャンルについて、歴史や理論を学びます。私の専門は西洋の近代美術史です。中学や高校で触れる美術史はミケランジェロやルノワールといった有名な芸術家の作品を教科書の上で鑑賞し、名前や年代を学ぶことが中心で、美術というものをあくまで情報として学んでいるんだと思います。

■卒業生
確かに絵画とじっくり向き合うというよりも、誰のどの時代の作品なのかを覚えることのほうに学びの軸はあった気はしますよね。

■先生
成城大学文芸学部　芸術学科でもそういった知識を持つことは大事ですが、覚えることが目的ではなく、その知識を用いつつ、どういう時代・社会背景だったから、その作品が作られたのかということを考察し、じっくりと作品と対峙しながら、その背景へと踏み込んでいくわけです。現在、美術館や展覧会などで見ることができるものの中には、実は宗教的な意味合いを持って教会の中に飾

られていたもの、革命や戦争を背景に意味を持って生まれたものなど、それぞれに歴史的背景や文脈があるわけです。世界の流れや歴史の歩みを通じて美術を学ぶことが魅力だといえるのではないでしょうか。

長い時間をかけて過去から現代へと生きてきた絵画の数々には、いろいろな物語があるのですね。

■先生

高校生でも知っているものだと《印象、日の出》《睡蓮》といった作品を送り出したクロード・モネという印象派の画家がいますよね。そのモネが、橋の架かったセーヌ川の情景を描いた作品があるのですが、その橋を注意深く見ると実は鉄道の橋なんですね。ちょうど鉄道が普及し始めたころで、モネは列車が走る風景をたくさん描いています。その橋はモネが住んでいたアルジャントゥイユという場所にあり、その鉄道橋の傍らには水面に浮かぶヨットが必ずといっていいほど描かれていた。これはなぜだと思いますか？

■大学生

なんだか謎めいていますね。歴史的な理由があったわけですね。

■先生

その通りです。実はそのアルジャントゥイユっていうのは、当時のパリの中流階級の人たちがヨット遊びをする場所で、描かれていた鉄道橋はパリとアルジャントゥイユをつなぐ交通手段なんです。モネが筆をとったのがだいたい 1870 年代でした。この年代から何か思いつかないですか？

■大学生

難しいですね。どういうことですか？

■卒業生

社会的に大きな動きなどがあったのでしょうか？

■先生

1870 年の普仏戦争です。アルジャントゥイユの鉄道橋は、不利な戦況に置かれたフランス軍が一時退却する際、プロイセン軍の侵攻を阻止するため、自ら破壊しているんです。戦後、鉄道橋は再び蘇るわけですが、モネはそれを描いたわけです。新しい一歩を踏み出したフランスの復興と、ヨットのような遊びに興じながら新しい暮らしに喜びを見出す中流階級の人々の様子を描いたのです。

■卒業生

なるほど、面白いですね。

■先生

ただ単に美しい色彩や風景といったものを楽しむだけではなく、その時代のある特定の雰囲気を表している絵だということを理解することで、さらに知の喜びは深まっていくことが美術史の醍醐味といえると思いますよ。

■大学生

確かにそうですね、知れば知るほど、作品への愛着のようなものがわいてきます。

■先生

美術というと作家個人の人生や芸術性が注目されがちです。しかしながら、作家は自分の暮らしの糧を得るために、売り物として絵画を描いていたことも忘れてはいけない事実です。自分の楽しみや趣味性だけで描いていたら単なる素人画家ですからね。「自分らしさや新しさを感じてもらえるものを作る」のと、「売れるものを作る」ことの間で常に揺れ動いているはずです。もちろん新しい試みは、最初はなかなか苦戦するわけです。すぐに人気が出たり、話題になったりすることはないのですから。だけど理解を示すコレクターが出てきたり、積極的にそういうものをプロモートする画商が出てきたりもする。だから美術っていうのは単なる個人の表現じゃなくて、社会的に作られて

いるものでもあるんですね。そういう時代の動きも歴史という大きな視点の中から知らなければいけないのです。

芸術作品の読み解き、歴史・時代考察など、様々な要素を持つ学問であると感じますが、実際の授業はどのように進むのでしょうか。

■先生

授業のタイプは大きく分けて二つですね。一つが講義で私たち教師が知識を授けるタイプのもの。もう一つが演習で学生が自主的に何かを学ぶスタイルのもの。要は英文で書かれた資料や文献の講読をしたり、自らで考察した内容をプレゼンテーションするような授業ですね。

■大学生

先生の講義は向き合うテーマが様々で学生たちも楽しみながら取り組むことができています。

■先生

そういってもらえるとうれしいですね。授業内容を考えるにあたっては、興味を持ちながら高いモチベーションを維持できるように配慮しています。例えば、何年代の美術はこう、その時代の次はこうというように、時代を追っていくと、年表を覚える感じになって飽きてしまいます。そこで、1 回ごとに一つのテーマを設けて、そのテーマに沿って各時代を見ていくようにしています。

ちなみにどのようなテーマがあるのでしょうか？

■先生

例えばそうですね…　彼女たちも聴いているテーマとしては「ヌード」がありますね。裸体というものが、古代の美術ではこのような解釈で表現されていた。しかし、近代に時代が移ると、こういう理由でそれまでとは違った解釈や芸術性を持つことになったというようなものですね。

■大学生

先生は、講義ではいつもユニークな視点で話をしてくださいますよね。

■先生

もうひとつの授業のスタイルとなっている演習は、講義とはガラリと趣が変わります。美術史は、方法論が固まってからまだ 150 年ほどしか経過していない比較的新しい学問の領域なので、その古典的な方法論のテキストを読んだりしています。

演習系の授業というお言葉を受けて質問です。例えば医学部では医療技術の習得、経済学部ではお金や経済活動を数値化するなど、学びにおいてなんらかのチェックポイントやゴールがありますけれど、芸術系の学部においてのそれは何になるでしょうか？

■先生

そういう点では文系の学問はゴールを学生に明確に伝えにくいところがあります。でも、基本的な方法論や見方というのはあるんです。学生には、作品やテーマを好き嫌いだけでとらえるのではなくて、理論的な考えのもと丁寧に向き合いなさいと指導しています。例えば、人物がたくさん描かれている絵画があるとしますよね。その場合、「この人の向きはこっちを向いている。こっちを向いてるということは、その視線の先にいる人とアイコンタクトをとっているという事だから、その二人の間で何か関係があるはずだ」という具合です。他にも、構図にも何らかの意図があるケースも珍しくありません。ある絵の全体を見た際に、どうやら右上から左下へ人の動きが感じられる。そんなケースの場合、何が予想できるか。

■卒業生

うーん。難しいですね。なんでしょうか？

■先生
その絵は実は教会に飾られていたものなんです。飾られた場所の下には祭壇があり、そこに立っている司祭に向かって絵の中の構図も働きかけるような工夫がなされているわけ。



■卒業生
なるほど。
■先生
そんな風にどんな絵もしっかりとした考えのもとに作られている。そういったことを全て観察から考察していくことも大切なことなんです。作業といえばいいのかな、それとも必須のプロセスかな？我々の言葉でディスクリプションっていうんですが、まず絵画を見て、描かれているものを普通の言葉で記述していきます。例えば、何歳くらいの女性がどういう衣装を着てどっちを向いているとか、この人とこの人がこれくらいの距離を持ってこういうポーズをとっているとか、描かれていることの事実を明確にする。その情報をもとにその絵を読み解き、何を伝えているのかを考えていくのです。

成城大学文芸学部　芸術学科に入学した理由について教えてください。

■卒業生
父が海外旅行が好きな人で、いろいろな国を訪問する度に美術館のカタログや画集などを買ってきてくれていたんですね。そういうのも見ていましたし、小さい時から美術館に連れて行ってもらいました。そういった思い出が芸術関連の学問に進むベースになっているのではないでしょうか。

幼い頃から美術館ですか。素敵なお父様ですね。

■卒業生
たくさんの美術品と触れ合ううちに美術ってすごくワクワクすることに気づいていったんです。いろいろな色彩も楽しいですし、「絵に描かれているお姉ちゃん、なんで笑ってるんだろう？」って考えるのも楽しかったです。進学を考えた時、美術の道はなんとなく志望していました。だけど、決して絵を描くことでなく、見る方が好きだったので美術史を学ぶことにしました。
■先生
美術史を教えている学校についてはどうやって探していったの？
■卒業生
全く情報がなかったですね。基本的に美術史って希少な学問ですからね。とりあえずインターネットを使って調べて、いくつかの大学で教えていることを知り、最終的に成城大学を選びました。
■大学生
私の場合は自分でイラストを描くのが好きでして、何か美術に関する分野への進学を希望してこちらに来ました。

絵を描いたりする授業はありませんが、その上で文芸学部を選んだのですか？

■大学生
もちろん知っていました。イラストはあくまで趣味の範囲。美術系の大学に進む道も検討しましたけれど、誰かと競いながら芸術作品をつくるみたいな環境に自分を置きたくないと思っていました。それでも芸術と関わりたいとは考えていたので、文芸学部にしたのです。
■卒業生
そんな感じの動機で入学する人も少なくありませんよ。事実、今は漫画家をやっている私の同級生

も似たような理由でしたからね。

■先生



文芸学部はくくりとしては文学部のようなものですから、芸術学科は実技は全く無いんですね。でも高校の時に音楽や演劇をやっていた、あるいは美術が好きだった。そこから興味が深まり、それと結びつく学びのジャンルとして、芸術学科を選んでくるというのは一番動機として多いと思います。

■卒業生

バレエをやっているから演劇を分析してみたいとか、将来、劇を手掛けたいからそれに関することを学びたい。そんな目的の人もいたりしますよ。

文芸学部ならではの特徴的な授業や学びの仕組みを教えてください。

■先生

２年生になると実習という授業の中で、美術館でさまざまな作品を鑑賞する機会があります。普通は芸術学科の教員がセレクトした展覧会に行かせて感想や考えたことをレポートとして出させます。特筆すべきはただ見に行くだけではなく、前もって担当の学芸員の方を招いて、どういうふうに展覧会を作ったかとか、鑑賞の仕方の解説などをしてもらいます。実習では、音楽会や舞台、映画も同じようなことをします。

■大学生

今はインターネットでいろいろなものが見られますが、やっぱり実物に接する体験のほうが大切な気がします。

■卒業生

成城大学は東京都心に近いという立地のメリットがあるので、展覧会や美術館にも足を運びやすいと思いますよ。

■先生

成城大学は、国立の美術館・博物館の常設展を無料で見ることができるキャンパスメンバーというものに加入していますから、どんどん観に行って欲しいですね。

●大学生活について

学校の様子について教えてください。

■先生

私は以前、国立の大学にいたんですね。そこと比較すると、全体的にはゆとりを感じます。キャンパスや学生たちの雰囲気がとてもいいんですね。しかしながら、授業が始まると様子は一変します。最近は先生が教室に入ってもおしゃべりがやまない学校もあるらしいですが、成城大学にはそれが一切ない。始業のベルがなると、お喋りがピタッと止むんです。それには感心しますね。

■大学生

たしかに先生の話をしっかりと聞く学生が多いと思いますよ。

■卒業生

大学生らしく、遊ぶところは遊んでいても、根は真面目、みたいなところはありますね。

印象に残る授業について教えてください。



■大学生

たくさんありますけれど、一番、楽しさを実感したのは西洋美術史演習です。好きな作品を一つ選んで、それをほかの作品と比較して、その作品がどういう事を伝えているかなどをまとめてプレゼンテーションする授業です。プレゼンテーション用の資料を作る中で、自分の知識も深まっていくのに充実感があります。

■卒業生

膨大な資料の中から、必要な情報を集めて、まとめていく。結構大変なことですよね。私もいやというほどやりましたよ。

■大学生

資料集めは特に難しかったです。題材としたジュール・シェレという画家の資料がそもそも少なくて。フランス語でネット検索したり、ようやく見つかった英語の論文などを頑張って読んだりしました。

■先生

そういった情報収集に関しての話題をひとつさせてください。ある意味成城大学の良さともいえる部分ですので。成城大学は比較的コンパクトな規模の大学です。それゆえ学生と教員の距離感がとても近い。何かわからないことがあれば、すぐに質問ができる環境にあります。また、ゼミや授業も小規模ですから、学びの質はとても凝縮されたものになるのです。

■大学生

スタッフの方のフォローが行き届いているのも、そういった理由からでしょうか。ラファエル・コランという画家に関する論文を探す際、なかなか見つからなかったことがありました。その時、図書館の参考係の方が論文を探すのを手伝ってくれまして、他の学校にある論文も依頼すればコピーをとりよせてもらえるなど、とても親切にしてくださったことを覚えています。本当に助かりました。

■卒業生

先生の中には、国立美術館や博物館で学芸員をされていた方々もたくさんいらっしゃることも、学生としてはうれしいことですね。美術に関するいろいろな裏話のようなものも聞けますからね。

●就職活動、仕事について

現在就かれているお仕事について教えてください。

■卒業生

SBI アートオークション株式会社にて、オークション関連の仕事に携わっています。年 4 回ほどオークションを開催しておりますが、出品する作品の準備、作品を紹介するカタログの作成、そしてオークションに参加いただく美術愛好家の方への営業活動など、幅広い分野を任されています。

■大学生

ネット上でのオークションですか？

■卒業生

ネットでも開催していますが、いまお話したのは、実際の会場を活用したものです。代官山のツタヤさんの隣の場所を借りて「こちらの作品は 10 万円からスタートします。15 万円、20 万円、25 万円。落札ありがとうございます」みたいな感じです。

■先生

どんな業務が主となるのですか？

■卒業生
正直、何でもやっていますね。オークションをやる前日に下見会というものを開催していて、出品作品を全部展示する機会を設けるのですが、その会場の設営や作品の額装なども大切な仕事です。
■大学生
いろいろな作品を扱っているんですよね。とても楽しそう。
■先生
彼女のように芸術系にいった子もいれば、学芸員として美術館で勤務している人もいる。そうかと思えば保険関係や銀行に進んだ人、メーカーで活躍する先輩も多数います。就職先のすそ野はとても広いと思いますよ。

学生時代の勉強が今の仕事に役立っている部分はありますか？



■卒業生
カタログなどの解説文を書くプロセスは、卒論やレポートを書くときと全く一緒なんですね。まずは、文献を探して作品に関する情報を頭に叩きこんだ上で、解説文を仕上げていくからです。
■先生
それを聞いて思うのは、例えば発表の場を例にすると、相手を見て相手にわかる話をすることが大切ですよね。それは一般の企業でも必要なことで、何かを調査してその結果を上司や取引先に示さなければならない。そういった論理的な考え方やまとめ方も、文芸学部では得ることができます。美術と関係ない就職をする場合でも、きっと役立つと思います。
■卒業生
それはとても感じます。社会人としての基礎もちゃんと鍛えられるというか。
■先生
ちなみに成城大学では 1 年生を対象に、「Write（書く）、Read（読む）、Debate（議論する）」の頭文字 をとった“WRD（ワード）”という、質の良い学びを自らで実践するための基礎的な能力を磨く授業を用意しています。一方的に知識を与えられるのではなく、学生自身が主体的に授業に取り組み、実践的な訓練を通じて３つのスキルを高めることができるのです。また「COMPASS」という名のキャリアサポートプログラムも独自の施策です。進路の定め方や、その実現に必要なスキルやキャリアは何かなどをグループワークやディスカッションを通じて考えていきます。他にも資格取得やインターンシップなど自己を高める制度が多数あります。

● 5 年後に向けて

5 年後に皆さんは何をしているでしょうか？

■卒業生
今後の目標としては、芸術に気軽に触れる機会をもっと世の中に発信したいと思っています。例えば、文学作品はしっかり読まないといけませんよね。時には難しい漢字も知らないと話はわからない。でも絵画は直感的に何かピンとくるものがある。色がキレイとか、迫力を感じるとか、誰もがわかりやすい感情をもつことができる。それだけに本当は間口が広い芸術だと思うんですね。だけど、実際に触れる機会はそうそうない。私は、もっと気軽に芸術がそばにある環境づくりにもチャレンジしたいと思っています。

■先生
若い人がもっと興味を持ってくれればいいですよね。社会と芸術がちゃんと接点を持てる日がくることに期待していますよ。
■大学生
まだ先のことは具体的にイメージできませんが、今やるべき課題を着実にこなして、将来進むべき道をじっくり考えていきたいと思います。できれば芸術系の方向に進めればいいですね。
■先生
若い頃からやっている画家の研究があって、それを１冊の本の形でまとめたいと思っています。長くやってきた事なので、知識の蓄積があるともいえますが、昔の知識だけでは不十分です。今の研究水準ともあわせながら、何かひとつの形として残せればいいですね。

●高校生へのアドバイス

高校生へのメッセージをお願いします。

■大学生
美術史というと、少しお堅いイメージがあるかもしれませんが、そんなことは全然ありません。ユニークな授業を受けていく中でどんどん興味がわき、面白くなってきますよ。
■卒業生
実は美術史っていうのは、言葉でないものを言葉に置き換えるのが基本なんですよ。そういう点では、国語力というものを鍛えておいたほうがいいかなと。
■先生
私は、もともと美術と歴史が好きで、高校の時には美術史ができる大学に進もうと思っていました。もし、今、高校生のみなさんが美術に興味を持っているのであれば、時間をつかって美術館に足を運んだりして、いろいろな作品を鑑賞する経験を持っておくとよいと思います。

最後に美術史を学ぶ楽しさをお伝えください。

■先生
時計のデザイン、洋服のデザイン、キャラクターデザインなど、みなさんも身近なところでデザインという言葉をつかっていますよね。対象はなんであれ、デザインという言葉が添えられたとき、その対象に美術的な感情を持ってみているということ。そういったことからも、美術とみなさんの接点は実は身近なところで存在しているんですね。美術史だからと難しく考えず、もっと気軽な気持ちで芸術と向き合うのも良いと思います。もし成城大学に進んだら、自由な発想で学んでください。美術と歴史の探究に終わりはないのですから。

●インタビューに答えていただいた方々●



■先生

喜多崎親先生

成城大学文芸学部芸術学科教授

東京都立青山高等学校出身。早稲田大学第一文学部美術史学専修卒業・同大学大学院文学研究科修士課程修了・博士課程中退。博士（文学）。国立西洋美術館学芸課主任研究官、一橋大学大学院言語社会研究科教授などを経て現職。



■卒業生

塚田萌菜美さん

SBI アートオークション株式会社勤務

茨城県立日立第一高等学校出身。成城大学文芸学部芸術学科卒業・同大学大学院文学研究科博士前期課程修了。現代アートを中心とした作品を取り扱うオークション会社で、作品を紹介するカタログ作成や美術愛好家の方への営業活動などに携わる。



■大学生

大槻玲奈さん

成城大学文芸学部芸術学科２年生（2016 年度取材当時）

神奈川県立横浜平沼高等学校出身。高校時代は漫画研究部に所属し、副部長として活躍。現在は将来芸術分野の仕事に就くことを目指し勉強中。